１　黒星病

A　発生生態

１　病原菌は枝の病斑で越冬し、４月頃から胞子を形成する。
２　降雨時に感染するが潜伏期間が３０日～４０日と長い。
３　低温多雨の条件下で発病が多い。

B　化学薬剤以外の防除

せん定時に発病枝を取り除き、発生源を少なくする。

C　薬剤防除のポイント

４月上旬から５月下旬の防除に重点をおく。防除時期を失しないよう注意する。

使用時期	農薬系統・一般名	ＦＲＡＣコード
４月上旬～５月下旬	ＭＢＣ系	１
	ＤＭＩ系	３
	ＱｏＩ系	１１

２　灰色かび病

A　発生生態

１　花弁に発生した菌が元となって、果実や葉に病斑を形成する場合が多い。
２　落弁期に降雨が続くと発生が多くなる。

B　化学薬剤以外の防除

園内の通風採光を図り、過湿にならないように注意する。

C　薬剤防除のポイント

降雨前の予防散布に重点をおく。

使用時期	農薬系統・一般名	ＦＲＡＣコード
３月上～中旬	ジカルボキシイミド系	２
	ＭＢＣ系・ジエトフェンカルブ混合剤	１・１０
	ＱｏＩ系	１１
	ビスグアニジン系	Ｍ７
	ビスグアニジン系・ポリオキシン混合剤	Ｍ７・１９

農薬使用時はラベルをよく読み、記載された登録内容に基づいて使用するとともに、農薬の使用を指導する際は最新の登録情報を入手してください。

３　かいよう病

A　発生生態

１　伝染源は枝の病斑である。
２　病原菌は細菌であるので、多発すると薬剤防除だけでは発生を防ぐことが難しい。

B　化学薬剤以外の防除

１　せん定時に発病枝を除去する。
２　園内が過湿になると発生しやすいので、排水に努める。
３　台風や強風雨時は本病の発生を助長するので、防風対策を行う。

C　薬剤防除のポイント

開花前の休眠期と開花直後から幼果期の防除に重点をおく。

使用時期	農薬系統・一般名	ＦＲＡＣコード
１２～１月 （葉芽発芽前）	銅剤	Ｍ１
４～５月	オキシテトラサイクリン剤	４１
収穫後	ストレプトマイシン剤	２５
	オキシテトラサイクリン・ストレプトマイシン混合剤	４１・２５

４　アブラムシ類

A　発生生態

ウメには多くの種類のアブラムシ類が寄生する。主な種類はモモアカアブラムシとモモコフキアブラムシであり、モモアカアブラムシは葉が縮れ、モモコフキアブラムシは葉に群生し、すす病とともに寄生部位はロウ物質で白く汚れる。

C　薬剤防除のポイント

防除が遅れると葉が縮れるので、発生初期の防除を徹底する。

使用時期	農薬系統・一般名	ＩＲＡＣコード
発芽展葉期～５月下旬	ネオニコチノイド系	４Ａ
	ピメトロジン剤	９Ｂ
	フロニカミド剤	２９

農薬使用時はラベルをよく読み、記載された登録内容に基づいて使用するとともに、農薬の使用を指導する際は最新の登録情報を入手してください。

５　ウメシロカイガラムシ

A　発生生態

１　交尾後の雌成虫が越冬する。１齢幼虫は、４月下旬から５月上旬頃、６月下旬から７月中旬頃、８月下旬から９月中旬頃の年３回発生する。

２　枝や幹に小さな円形白色のカイガラが多数付着し、寄生が多いと樹勢の低下や枝枯れを引き起こす。

B　化学薬剤以外の防除方法

１　トビコバチ科やツヤコバチ科の多くの寄生バチ、ヒメアカホシテントウムシなどの有力な天敵がいるため、天敵を保護し、天敵に悪影響の小さい薬剤を選択し防除する。

２　寄生が多いと防除効果が低くなるので、ワイヤーブラシなどでカイガラをこすり落とす。

C　薬剤防除のポイント

１　マシン油乳剤および石灰硫黄合剤以外は、成虫に対する効果は低いので、幼虫期に防除を行う。

２　マシン油乳剤は、品種や気象条件、樹勢の低下などにより薬害が発生する場合があるので注意する。

使用時期	農薬系統・一般名	ＩＲＡＣコード
１２月	マシン油乳剤	なし
開花前	石灰硫黄合剤	ＵＮ
４月下旬～５月上旬	ネオニコチノイド系	４Ａ
６月下旬～７月上旬	有機リン系	１Ｂ
	ネオニコチノイド系	４Ａ
８月下旬～９月上旬	有機リン系	１Ｂ
	昆虫成長制御剤（ブプロフェジン）	１６

農薬使用時はラベルをよく読み、記載された登録内容に基づいて使用するとともに、農薬の使用を指導する際は最新の登録情報を入手してください。

６　カメムシ類（チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシ）

A　発生生態

1　チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシが主体である。
2　ヒノキやスギの球果で増殖するので、これらの球果の豊凶と被害の多少とは密接な関係にあり、前年球果が豊作の場合は越冬虫が多く、被害が多発する傾向にある。越冬したカメムシ類が果樹園に飛来し被害が発生するため、越冬量が多い年には幼果期から収穫期まで飛来が続くので注意する。
3　年によりその越冬量や次世代の発生量が大きく異なるため、生育期を通し注意が必要である。
4　小ウメや幼果の早い時期に加害されると落果する場合がある。また、大粒種では果肉の陥没や加害部からのヤニの発生及び果肉の硬化が発生する。

チャバネアオカメムシ

ツヤアオカメムシ

B　化学薬剤以外の防除方法

ヒノキやスギを防風樹にしている場合は、管理を徹底し、結実をさせないか、できるだけ除去する。

C　薬剤防除のポイント

1　地域や園の条件でも飛来密度が異なるため、５月から６月にかけて園内を良く見回り、発生を認めたら、直ちに防除を行う。
2　病害虫防除所からのカメムシの発生情報（病害虫防除所のホームページ（https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html））に注意し、防除を行う。

使用時期	農薬系統・一般名	ＩＲＡＣコード
５月～６月	ピレスロイド系	３Ａ
	ネオニコチノイド系	４Ａ

7　モモヒメヨコバイ

A　発生生態

1　成虫は黄緑色の体色で、体長が3.0～3.5ｍｍである。若齢幼虫の体色は薄い黄色で、終齢幼虫になるにつれて成虫と同じ黄緑色になる。なお、頭頂部に特徴的な黒点が１つある。
2　モモやウメ、スモモなどのバラ科果樹の葉を吸汁し、白化させる。吸汁が著しい場合には、早期落葉することがある。
3　多発生した被害葉の葉裏には、多くの脱皮殻が付着する。
4　展葉期から落葉期まで定着が確認されており、葉上で世代を繰り返すと考えられる。

モモヒメヨコバイ成虫

モモヒメヨコバイ成虫の頭頂部の黒点

白化した被害葉

B　化学薬剤以外の防除方法

1　本種の発生及び被害の早期発見に努める。被害葉が認められた場合は速やかに除去し、適切に処分する。

C　薬剤防除のポイント

被害葉が認められた場合は速やかに薬剤散布を行う。

使用時期	農薬系統・一般名	ＩＲＡＣコード
５月～１０月（発生時）	ジアミド系	２８